

ジュリアの音信^{おんしん}



これは、120年前にあった、有名な本当にあったお話です。

人は死んでも死なない？

あの世と、この世をつなぐ

不思議な、本当にあったお話。



ジュリア

プロローグ

今から 120 年前のことです。

ジュリアは病気で、アメリカのボストンで亡くなりました。

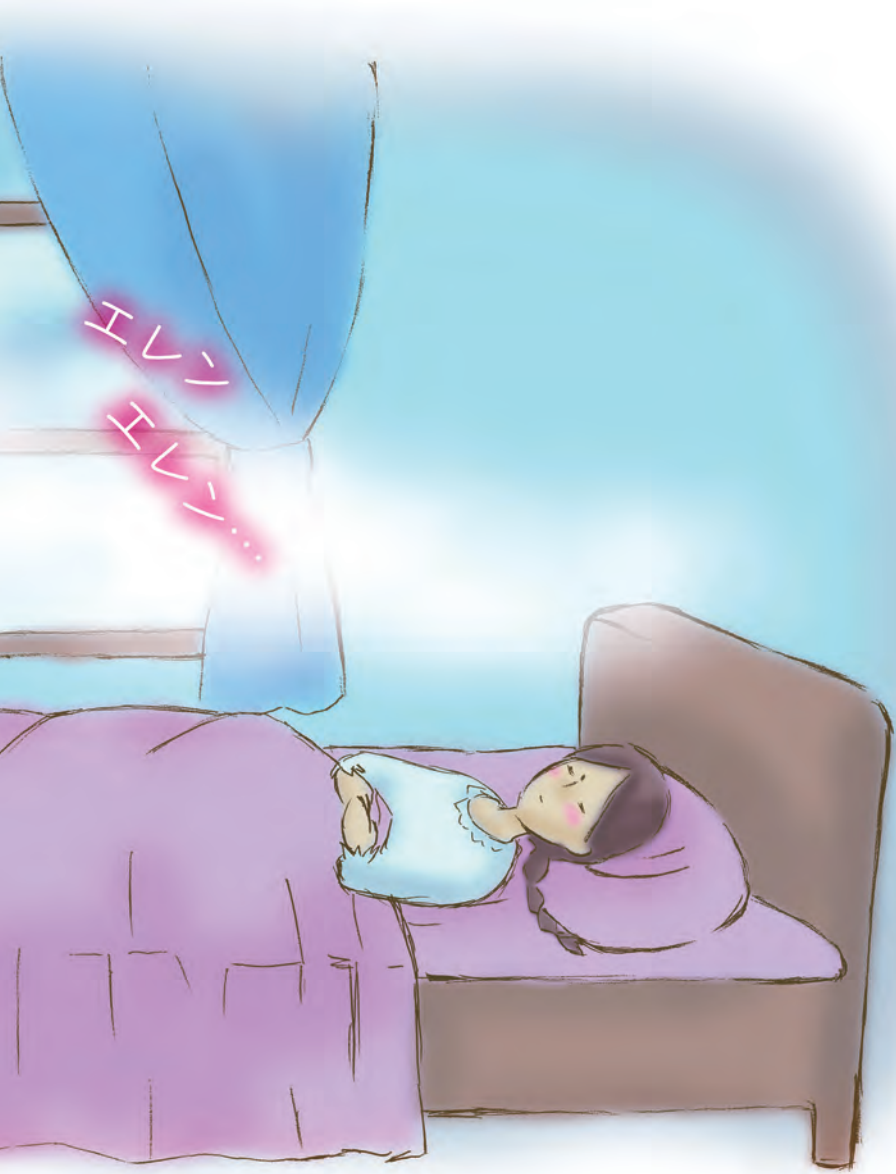
それから 3 ヶ月たったある日のこと、

ロンドンに住んでいる、親友のエレンさんに

こんな事があったのです。



エレン



「エレン、エレン」

誰か、優しい声で呼ばれた気がして、エレンは目を覚ましました。

一八九二年、春、明け方近いある朝のことです。いいえ、目を覚まされたのか、まだ夢の中なのかハッキリしませんでした。

「エレン……………エレン」

その優しい声がもう一度呼びました。



「だーれ？」

窓の外は白みかけていて、心なしか白い霧で一杯でした。そう、ロンドンの朝の霧は珍しいことではありませんでしたので。

でも、その霧が光りながら部屋に入ってきて、淡いあわピンクの光を伴いながら、美しいとともな楕円だえんの形の姿になりました。



「だーれ？」

エレンは今度は本当に声に出して、そう言いました。すると、だえん楢円の形がなぜかほほえ微笑んだように光りました。そうして、

「ミネルヴァ、ミネルヴァ」と、ささやくように、でもハッキリとエレンの耳には明るい声が聞こえました。

「エッ、ミネルヴァ？

……ああ、ウィラー

ド夫人のことネ」……

……でも、でも、ミネ



ルヴァとは、ふじんきんしゅゆ婦人禁酒同盟の会長のウィラード夫人のことで、それはエレンが親友のジュリアと二人で、こっそりつけたニックネームだったのです。だからミネルヴァのニツクネーム名前を知ってるのは、エレンの他にはジュリアしかない訳です。

「ジュリア？」と、エレンが聞くと、美しい楕円だえんの光が、淡い淡いあわあわ人の形になっていきました。